

ギヤスケルとアン・サッカレー・リッチー

矢次 綾

ギヤスケルは後輩作家によってどのように評価され、どのような影響を与えたのだろうか。本稿では、サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) の長女で、20世紀の初頭以降、ほとんど読まれていないが、1860年代および70年代には人気作家だったアン・サッカレー・リッチー (Anne Thackeray Ritchie, 1837-1919) の場合について検討する。リッチーは1860年、23歳の誕生日の直前に、スラム街の子供たちの教育について考察したエッセイ「小さな学習者たち」(“Little Scholars”) が『コーンヒル』誌に掲載されたときに文壇デビューし、キャリアの前半は主にお伽話の再話や長短編小説、後半は先輩作家の伝記や作品の序章、文化人についての伝記的なエッセイや回想などを執筆している。目に付くのは英仏の女性作家に関するものであり、それらを統合すれば、17世紀以降の英仏における女性作家列伝と呼べそうなものが完成する。その中に、『ブラックスティック・ペーパーズ』(Blackstick Papers, 1908) に収録されたエッセイ「ギヤスケル夫人」、『クランフォード』(Cranford, 1851-53) の序文(1891)、『ポーチから』(From the Porch, 1913) 収録の「現在の女性作家についての講話」(“A Discourse on Modern Sibyls”) におけるギヤスケルに関する箇所がある。¹

本稿では、第一節で、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのリッチー評をもとに、彼女がギヤスケルを評価するに足る人物であることを検証し、第二節でギヤスケルがリッチーをどのように見ていたかを分析する。第三節で、リッチーが先輩女性作家についてどのような思いを抱き、その中でギヤスケルをどのように位置づけていたかについて吟味し、リッチーがギヤスケルのどのような点を評価したのか、どういった影響を受けているかについて解明する。

1 リッチーはどのように評価されているか

批評家もしくは文学史家としてのリッチーを評した文献を提示するのは困難だが、彼女の小説が公的もしくは私的に評されたものは容易に見つけることができ

る。例えばエリオット (George Eliot, 1819-80) が書簡の中で、リッチー初の長編小説『エリザベスの物語』(*The Story of Elizabeth*, 1863) を「トロロプの作品ほど愉快ではないが、うまく書けています」と賞賛し (Eliot 4: 209)、別の書簡では、「(フィクションを読まないと決めている時期も) ミス・サッカレーの短編小説だけは例外です。彼女の作品が手元にあると、私は読みたい気持ちを抑えることができません」と記している (Eliot 6: 123)。ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) は「小説の技巧」(“The Art of Fiction,” 1884) において、リッチーを天才 (a woman of genius) と呼び、かつて垣間見たものを小説の一場面として再現する彼女の描写力について、彼女自身から聞いた話を交えながら次のように記している。

[O]nce in Paris, as she ascended a staircase, [she] passed an open door where, in the household of a *pasteur*, some of the young Protestants were seated at table round a finished meal. The glimpse made a picture; it lasted only a moment, but that moment was experience. She had got her direct personal impression, and turned out her type. She knew what youth was, and what Protestantism; she also had the advantage of having seen what it was to be French, so that she converted these ideas into a concrete image and produced a reality. (172)

ジェイムズはリッチーの名前にも作品名にも言及していない。それでも、彼が彼女について述べていると考えられる理由は、厳格なカルヴィニストの祖母と共に幼少期をパリで過ごしたりッチーが (Jay 199)、親交を深めつつあったジェイムズに、² 当時の話をしても不思議ではないから、また、『エリザベスの物語』の中に、パリ在住の牧師の義父と同居し始めたばかりのヒロインが、牧師の被後見人の耳障りな足音を聞きながら階段を降りて食堂に入り、禁欲的で質素な食卓にげんなりする様子が次のように描かれているからである。

There was a small table-cloth, streaked with blue, and not over clean, bunches of bread by every place, and iron knives and forks. Each person said grace to himself as he came and took his plate. Only Elizabeth flung herself down in a chair, looked at

the soup, made a face, and sent it away untasted.

“Elizabeth, ma fille, vous ne mangez pas,” said M. Tourneur, kindly.

“I can’t swallow it!” said Elizabeth.

“When there are so many poor people starving in the streets, you do not, I suppose, expect us to sympathize with such pampered fancies?” said the prim lady.
(19-20)

リッチーは祖母と過ごした 1830 年代の終わりから 40 年代にかけてのパリを『エリザベスの物語』で再現していると、ジェランも指摘している (Gérin 16)。

リッチーの妹ミニー (Harriet Marian Thackeray Stephen, 1840-75) の夫、レズリー・スティーヴン (Leslie Stephen, 1832-1904) は、リッチーの天分を認めながらも、その欠点を鋭く指摘している。彼は後に再婚するジュリア (Julia Duckworth, 1846-95) への書簡の中で、リッチーを「悪いヴァイオリンしか持たない超一流の演奏家」や「絵具や筆か何かが混乱しているため、輪郭がぼやけていてはつきりしない才能ある画家」に喩え、³ リッチー作品には、構成や一貫性において問題があるという認識を示している。スティーヴンとジュリアの娘で、リッチーの姪にあたるヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) は、リッチーが 81 歳で他界した約一週間後の 1919 年 3 月 6 日発行の『タイムズ・リタラリー・サプルメント』に追悼文「レディ・リッチー」を寄稿し、その時点で既に忘れ去られた作家だったリッチーについて次のように述べている。

The death of Lady Ritchie will lead many people to ask themselves what she has written, or at least which of her books they have read; for she was never, or perhaps only as Miss Thackeray for a few years in the ‘sixties and ‘seventies of the last century, a popular writer. And, unless we are mistaken, they will find themselves, on taking down ‘The Story of Elizabeth’ or ‘Old Kensington,’ faced with one of those curious problems which are more fruitful and more interesting than the questions which admit of only one answer. The first impression of such a reader will be one of surprise, and then, as he reads on, one of growing perplexity. How is it possible, he will ask, that a writer capable of such wit, such fantasy, marked by such a distinct

and delightful personality, is not at least as famous as Mrs. Gaskell, or as popular as Anthony Trollope? (Woolf 279)

続けてウルフは、リッチー作品が読まれなくなった要因が、読者に意識の転換をもたらすほどのインパクトに欠けるという作品そのものの問題というよりも、読者の意識の変化にあると記し、長編小説『懐かしのケンジントン』(*Old Kensington*, 1873) に特に注意を払いながら、時代の雰囲気や精神、特定の土地や人々の様子を描出するリッチーの力を高く評価している (281-83)。

批評家もしくは文学史家として力量がリッチーにあることを示唆した例として、誰がサッカー伝を書くかという、その死の直後からたびたび持ち上がっていた懸案が1875年に再燃したとき、リッチーが書くべきだとジェイムズが公然と主張したことが挙げられる。⁴ その数年後、オリファント (Margaret Oliphant, 1828-97) がブラックウッド社版「英国の読者のための海外古典」シリーズの編者として、リッチーの力量ではなく、サッカーの娘というネーム・ヴァリューを見込んで『セヴィニエ侯爵夫人』(*Madame de Sévigné*, 1881) の執筆を依頼したように (Colby 261-62, n. 43)、ジェイムズもリッチーの立場を考え、そのように主張した可能性はある。しかしながら、仮にそうであっても、リッチーの小説家としての才能を高く評価した彼が、サッカーの娘であるという理由だけでそう主張したとは考えにくい。

リッチーには文筆家としての力量があることを証明するかのようになり、『セヴィニエ侯爵夫人』は好評を博し (Gérin 197-200)、続けてリッチーは、『女性作家読本——ミセス・バーボールド、ミセス・オーピー、ミス・エッジワース、ミス・オースティン』(*A Book of Sibyls: Mrs. Barbauld, Mrs. Opie, Miss Edgeworth, Miss Austen*, 1883) など、女性作家についての伝記的な内容を含む多くの著作を生み出した。その文章に、ステイヴンが小説について指摘したような構成や一貫性における問題点が見いだされるとしても、先輩作家の作品や人生に関するリッチーの目の付け所の的確さや、描写力が読者を惹きつけたのであろう。リッチーが文学的な審美眼の持ち主だった証拠として、彼女がオースティンをいち早く評価し、エッセイ「ジェイン・オースティン」(“Jane Austen,” 1873) を書いたことが挙げられるだろう。このエッセイは、オースティンの『批評と評価』

(*Critical Assessments*) 第一巻に、「19世紀における反応」(“The Nineteenth-Century Response”)の一つとして掲載されている。⁵ 以上より、リッチーには、ギヤスケルを評価する資格があると考えられる。

2 ギヤスケルから見たリッチー

ギヤスケルが作家としてのリッチーに注目していた形跡は、伝記や書簡を読んだ限りで見当たらない。ギヤスケルにとってのリッチーは、サッカレーの娘、もしくは、リッチーと同年に生まれた次女のミータ (Margaret Emily Gaskell, 1837-1913) の友人以外の何者でもなかったと推測される。リッチーのデビュー作「小さな学習者たち」は、『コーンヒル』誌上の他の多くの著作と同様に匿名で掲載されたが、サッカレーが「うちのぼちゃぼちゃのアニー」の作品だと書簡等を通して友人たちに吹聴したために匿名性が保たれず (Gérin 119)、ジョージ・スミス (George Murray Smith, 1824-1901) と親しかったギヤスケルの耳にも、その情報は届いていたはずである。その後リッチーは、ギヤスケルが亡くなる 1865 年までに、数編のエッセイを『コーンヒル』誌に寄稿し、1863 年には『エリザベスの物語』を同誌に連載して、既述した通り、例えばエリオットやジェイムズによって高く評価されている。一方、ギヤスケルがリッチーに言及したものとして現在出版されているのは、ミータとの友人関係について述べた書簡 (*Letters* 412, 442) と、サッカレーが 1863 年に急死してから約一週間後、20 代半ばだったリッチーとその妹のミニーの今後についての懸念を表現した、ジョージ・スミス宛の書簡 (*Letters* 545) のみである。

ギヤスケルがリッチーとミニーの今後を懸念したのは、サッカレーの妻イザベラ (Isabella Gethin Thackeray, née Shawe, 1816-93) が統合失調症 (Schizophrenia) であり (*Thackeray's* 25)、介護者に預けられているという公然の秘密を知っていたためであろう。その症状はミニー出産後に現れ、3 歳だったリッチーをマーゲートの海岸で溺死させかけたことで、イザベラは母親としての役目を果たせないと判定された (Gérin 9-10)。以降、リッチーは 9 歳になるまで、パリ在住のサッカレーの実母にミニーと共に預けられる。それと同時にリッチーは、サッカレーの知人だったエリザベス・バレット・ブラウニング (Elizabeth Barrett Browning, 1806-61)、ジェイン・カーライル (Jane Welsh Carlyle, 1801-66)、ジュリア・

マーガレット・キャメロン (Julia Margaret Cameron, 1815-79) たちから、母親的な愛情を注がれる (MacKay 57)。ギヤスケルは 1850 年頃にサッカーと知り合い、心を許せる相手だと思っていたが、家族ぐるみで交流するようになる (Uglow 460)。ギヤスケルとサッカー姉妹が他の文人共々ハムステッドのジョージ・スミス邸に夕食に招かれたこともある。その席で隣り合わせたミニーとステイーヴンの様子を見たギヤスケルが、二人は結婚するのではないかと予言したことを、ステイーヴン自身が書き留めている (Stephen 9)。ただし、リッチーがギヤスケルと共に過ごした折のことを回想するとき、彼女が記しているのは、そのようなエピソードや、ギヤスケルの母親的な優しさといった人柄ではなく、ストーリーテリングの巧みさや、言葉の端々に現れる機知やユーモアといった小説家としての資質に直結する特徴である。十代半ばで筆耕者として父の仕事を手伝い始め、既に小説を書き始めていたリッチーにとって (Gérin 118)、ギヤスケルは、友人の母親、もしくは、母親代わりとして慕う存在というよりも、尊敬する先輩作家であり、その一挙一動を注意深く観察していたのであろう。バレット・ブラウニングも言うまでもなく先輩作家であり、リッチーは『英国偉人事典』(*The Dictionary of National Biography*) 初版 (1885) のバレット・ブラウニングの項を担当しているが、回想録的なエッセイに記しているのは、その母親的 (motherly) で立派な人柄であり (*Records* 160, 190)、文人としての側面ではない。それは、彼女と交流していたとき、リッチーがまだ 9 歳以下の子供だったためであろう。

3 リッチーによる女性の作家列伝におけるギヤスケルの位置とリッチーが享受した影響

リッチーは自分のペルソナをミス・ウィリアムソン (Williamson) と呼び、父ウィリアムから「書く」という男の仕事を引き継いだ娘としての自覚を表現する一方、女性が紡いできた文学の伝統の継承者としての自覚も持っていた。その証拠に、リッチーは、ミス・ウィリアムソンとその友人の未亡人が知り合いの若いお嬢さんについてお喋りをしているという外枠の中で、「眠り姫」などのお伽話を再話している。リッチー自身が、ドーナワ伯爵夫人 (Marie-Catherine Le Jumel de Barneville, later Baroness d'Aulnoy and Countess d'Aulnoy, 1650/51-1705) のお伽話集の序文で述べているように (ix)、お伽話の再話は有名無名の女性たちがフ

ランスのサロンで伝統的にやってきたことだった。リッチーはパリのサロンをロンドンの中産階級の居間に置き換え、サロンに集う女性たちと同じことを自分のペルソナとその友人に行わせた。そうすることを通して、リッチーは、女性たちが紡いできた文学の伝統を自分が継承しているという自覚を表現しているのである。リッチーがそのような自覚を持っていたことと、英仏の先輩女性作家についての伝記やエッセイを著し、17世紀以来の英仏の女性作家列伝を結果的に作り上げたことは、無関係ではないだろう。先輩女性作家について書き記すこともまた、女性がどのようにして文学の伝統を紡いできたかを再現し、その様子を後世に伝える行為に他ならないからである。

リッチーがギヤスケルについて記した出版物は、既述したように、『クラフフォード』の序文、「ギヤスケル夫人」、「現在の女性作家についての講話」の3編である。その中でも、ギヤスケルがリッチーにとってどのような存在であるかが端的に述べられているのは、ヴィクトリア朝の女性作家たちがどのような活躍をしたのかを概観した「講話」である。リッチーによれば、シャーロット・ブロンテ、エリオット、オリファント、ギヤスケルは「自分が若い頃に有名だった4人の女性作家たち」という点で共通しているが、ブロンテとエリオットが「魔法使い」(magician)である一方で、ギヤスケルとオリファントは「啓蒙者」(torchbearer)だった(“Discourse” 6)。ブロンテを「魔法使い」と呼ぶ理由は、文学界に強い影響を及ぼしただけではなく、1846年にジョージ・スミスと共にサッカー家を訪れ、少女だったリッチーを、ジェイン・エアという物語の主人公が目の前に現れたような気分させてくれた(*Thackeray's* 57)ためである。エリオットを「魔法使い」と呼ぶ理由は直接的に述べられていないが、その小説家としての技法について、リッチーがギヤスケルやオリファントと比較しながら述べている箇所から推測することができる。

George Eliot and Mrs. Oliphant seem to be Rulers in their different kingdoms of fancy; George Eliot watching her characters from afar, Mrs. Oliphant in a like way describing but never seeming subject to, the thronging companies she evokes. Mrs. Gaskell, on the contrary, became the people she wrote about. When she wrote of Charlotte Brontë, for instance, she saw with her eyes and imbibed her impressions.

In the same way in her stories she seems inspired by each character in turn, whether it is Molly Gibson or her stepmother, or Miss Matty and Miss Deborah, or shall we instance Philip Hepburn in *Sylvia's Lovers*, walking along the downs in the darkness, looking towards the lights in the distant valley and listening to the clang of the New Year bells? ("Discourse" 13)

同様の分析は「ギヤスケル夫人」でもなされており、小説世界の「支配者」であるかのようなエリオットとオリファントは『テンペスト』のプロスペローに喩えられている ("Gaskell" 217)。要するに、リッチーの視点に立てば、ギヤスケルが人物の目で小説世界を見て描写しているのに対し、人物との間に一定の距離を取り客観的に描写するエリオットとオリファントの技法は「魔法」なのである。リッチーが「講話」の中でオリファントを「魔法使い」ではなく「啓蒙者」と呼んでいる理由は、彼女が『セヴィニエ侯爵夫人』の執筆を依頼することによって伝記作家としての道を開いてくれたという敬意と感謝を抱いていたためであろう。

ギヤスケルが「登場人物になる」 ("Gaskell" 218) ことによって「生き生きとした描写」(217) を成し遂げることができる根底には、生来のストーリーテラーとしての才能があると、リッチーは推察している。彼女がギヤスケルのその才能に感服したのは、ジョージ・スミス邸で、ギヤスケルがスコットランドに伝わるゴースト・ストーリーを語るのに耳を傾けたときだった。『クランフォード』の序文の中で、リッチーはその折のことを回想している。

"I believe the art of telling a story is born with some people," writes the author of *Cranford*; it was certainly born with Mrs. Gaskell. My sister and I were once under the same roof with her in the house of our friends Mr. and Mrs. George Smith, and the remembrance of *her voice* comes back to me, harmoniously flowing on and on, with spirit and intention, and delightful emphasis, as we all sat indoors and gusty morning listening to her ghost stories. They were Scotch ghosts, historical ghosts, spirited ghosts, with faded uniforms and nice old powered queues. (ix)

リッチーは「ギヤスケル夫人」でもそのときのことに触れ、ギヤスケルが「登場人物になった」例として、『シルヴィアの恋人たち』(Sylvia's Lovers, 1863)の中でヒロインの父親が幽霊話をする場面を挙げている("Gaskell" 213)。すなわち、リッチーは、この場面でギヤスケルがヒロインの父親の口を借りてストーリーテリングをしていると考えているのである。

作者が「登場人物になり」、人物の目で見、人物の口を借りて語る様子はリッチーの小説にも見られる。本稿第一節において、ジェイムズがリッチーの天分を認める証拠として挙げている『エリザベスの物語』の一場面を引用したが、この場面でリッチーはヒロインの目と耳を通して、プロテスタントの禁欲主義的な生活態度を見聞し、げんなりしている。パリで過ごした幼少時代、カルヴィニストの祖母の厳格な教育に反発していたリッチー (Jay 199) が、ヒロインについて叙述しながら、当時を追体験していると解釈することもできるが、いずれにしても、リッチーはギヤスケルに倣い、登場人物と一体化している。このような自分と作品、もしくは作中人物との関係についても、リッチーはミス・ウィリアムソンというペルソナを通して表現している。すなわち、リッチーはミス・ウィリアムソンの口を借りてお伽話を再話するだけでなく、彼女を作品内に登場させ、人物たちと交流させている。長短編の小説においても同様である。例えば『エリザベスの物語』第12章に、メアリという名前の老齡期の人物がヒロインのゴッドマザー的な人物の友人として登場し、自分がこの小説の語り手であることを読者に明かしている。メアリはミス・ウィリアムソンのファーストネームであり、リッチーは彼女の目を通して小説世界を見ながら、ヒロインの様子を叙述してきたことを示唆しているのである。

要するに、リッチーにとってギヤスケルは、友人ミータの母親というよりも、その一挙一動を観察せずにはいられない偉大な先輩作家であり、「登場人物になって」語るという手法を、作品を通して自分に教え示してくれた「啓蒙者」だった。そういったギヤスケルに対する尊敬と感謝の念を、リッチーが後年に記した『クランフォード』の序文や、エッセイ、講演のための原稿から読み取ることができるのである。

注

本稿は日本ギヤスケル協会第30回例会（2018年6月2日、於岡山国際交流センター）での研究発表に加筆修正を施したものである。本稿は、2018（平成30）年度松山大学特別研究助成の研究成果として執筆したものである。

- 1 “Sybil”は、女性作家を指すリッチーの用語である。*A Book of Sibyls: Mrs. Barbauld, Mrs. Opie, Miss Edgeworth, Miss Austen* (1883)のタイトルについて考えていたとき、リッチーは荒野を通りながら『マクベス』の魔女が登場する場面を連想し、女性作家はみんな魔女なのではないかと思ったことに由来する。このことについてジョージ・スミスに告げた書簡をマッケイが引用している (MacKay 74)。
- 2 リッチーと実際に会ったばかりの1878年、妹 (Alice James, 1848-92)宛の書簡の中で、ジェイムズはリッチーを“the very foolishest talker (as well as most perfectly amiable, and plainest, woman) I have lately encountered” (James, *Letters* 157)と呼んでいるが、2人は親交を深め、生涯の友になった (Gérin 285, Aplin 33)。
- 3 スティーヴンがリッチーをこのように評した1877年の書簡を、アラン・ベルが引用している (Bell xxiii)。
- 4 この案件は、サッカレー全集 (*Thackerayana*) が1875年に発行されたことをきっかけに再燃した (Aplin 119)。
- 5 『批評と評価』において「ジェイン・オースティン」の作者のファーストネームは“Anna”と綴られているが、そこに掲載されているのは明らかにリッチーのエッセイである。

引用文献

- Aplin, John. *Memory and Legacy: A Thackeray Family Biography, 1876-1919*. Cambridge: Lutterworth, 2011.
- Bell, Alan. “Introduction.” *Sir Leslie Stephen’s Mausoleum Book*. Oxford: Clarendon, 1977. ix-xxxiii.
- Colby, Vineta and Robert A. *The Equivocal Virtue: Mrs. Oliphant and the Victorian Literary Market Place*. Hamden, Conn.: Archon, 1966.
- Eliot, George. *The George Eliot Letters*. 9 Vols. Ed. Gordon S. Haight. New Haven: Yale UP, 1954.
- Gaskell, Elizabeth. *The Letters of Elizabeth Gaskell*. Ed. John A. V. Chapple and Arthur Pollard. Manchester: Mandolin-Manchester UP, 1997.

- Gérin, Winifred. *Anne Thackeray Ritchie: A Biography*. Oxford: Oxford UP, 1981.
- James, Henry. "The Art of Fiction." 1884. *The Art of Criticism: Henry James on the Theory and the Practice of Fiction*. Ed. William Veeder and Susan M. Griffin. Chicago: U of Chicago P, 1986. 165-83.
- . *Henry James Letters*. 4 Vols. Ed. Leon Edel. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1975.
- Jay, Elisabeth. "In Her Father's Steps She Trod': Anne Thackeray Ritchie Imagining Paris." *The Yearbook of English Studies* 36. 2 (2006): 197-211.
- MacKay, Carol Hanbery. *Creative Negativity: Four Victorian Exemplars of the Female Quest*. Stanford: Stanford UP, 2001.
- Ritchie, Anne Thackeray. "Discourse." *From the Porch*. London: Smith, Elder, 1913. 3-30.
- . "Introduction." *The Fairy Tales of Madame D'Aulnoy*. Trans. Miss A. Macdonell and Miss Lee. London: Lawrence and Bullen, 1892.
- . "Mrs. Gaskell." *Blackstick Papers*. London: Smith, Elder, 1908. 209-32.
- . "Preface." *Cranford*. London: Macmillan, 1898.
- . *Records of Tennyson, Ruskin and Browning*. London: Macmillan, 1892.
- . *The Story of Elizabeth with other Tales and Sketches*. Boston: Fields, Osgood, 1869.
- . *Thackeray's Daughter: Some Recollections of Anne Thackeray Ritchie*. Ed. Hester Fuller Thackeray and Violet Hammersley. Dublin: Euphorion, 1952.
- Stephen, Leslie. *Sir Leslie Stephen's Mausoleum Book*. Ed. Alan Bell. Oxford: Clarendon, 1977.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Woolf, Virginia. "Lady Ritchie." *The Times Literary Supplement* (6 March 1919). Reprinted in Winifred Gérin, *Anne Thackeray Ritchie: A Biography* (Oxford: Oxford UP, 1981), 278-83.

(松山大学教授)

Elizabeth Gaskell and Anne Thackeray Ritchie

Aya YATSUGI

How was Elizabeth Gaskell evaluated in her own time and what influence did she have on younger novelists? To present answers to these questions, this essay focuses on Anne Thackeray Ritchie, William Thackeray's eldest daughter and a novelist, biographer and essayist who was quite popular in Victorian England, although her work has been neglected since the beginning of the 20th century. First, Ritchie's capability to appreciate other novelists and their novels is examined by considering how she herself was evaluated as a novelist and biographer by her contemporaries, including Henry James. Next, attention is turned to the personal relationship between these two women writers. It is discovered that, while Gaskell regarded Ritchie as a friend of her eldest daughter rather than as a writer, Ritchie appreciated Gaskell's gifts as a storyteller and regarded Gaskell highly as one of her predecessors. Her appreciation of Gaskell is further investigated through Ritchie's essay "Mrs. Gaskell," her preface to *Cranford*, and her lecture "A Discourse on Modern Sibyls." ("Sybil" is Ritchie's term for women writers.)

In "A Discourse on Modern Sibyls," Ritchie situated Gaskell among the four most famous women writers of her youth and, calling her a "torch-bearer," pointed out those features setting her apart from the other three, i.e., Charlotte Brontë, George Eliot and Margaret Oliphant. Gaskell, according to Ritchie, characteristically became "the people she wrote about" and, by seeing the world in her novels through the eyes of her characters and talking with their mouths, created strikingly realistic descriptions. Gaskell, for example, told ghost stories in the words of the heroine's father in *Sylvia's Lovers*, just as she herself had actually done, for example, in 1862 at the house of George Smith, the publisher of *The Cornhill*. Interestingly, a similar narrative feature is seen in Ritchie's works such as *The Story of Elizabeth*. From this, it can be concluded that Ritchie most appreciated Gaskell's way of empathizing with her characters and adopting their perspectives in her works.